北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

入浴に恐怖を示した幼児の事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 隆章 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008359

釧路論集 －北海道教育大学釧路校研究紀要－ 第39号（平成19年）
Kushiro Ronshu, - Journal of Hokkaido University of Education at Kushiro - No. 39(2007): 63-66.

入浴に恐怖を示した幼児の事例

小 川 隆 章
北海道教育大学釧路校

An infant's phobia treated with reciprocal inhibition therapy.

Taka-aki OGAWA
Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

要 旨

本稿の目的は１歳７ケ月の幼児が入浴に対して形成した恐怖症の成立とその解消の経過を報告することである。恐怖症の成立過程は行動主義心理学の提唱者のワトソンらの古典的な実験と類似していた（注１）。また、治療過程は、これも有名なM．C．ジョーンズやベントラーの取り組みときわめて良く似ていた。そこで、これらの先駆的な研究を参照して、この事例を報告することになった。

問題の発生

M男（１歳７ケ月）は父親（30歳）、母親（30歳）、弟（生後20日）、祖父、祖母と同居していた。母親は２番目の子を出産して間もなく、本児の世話は祖母がすることが多い時期だった。暑い時期のため、広い庭で、ミニプールを出し、同じ敷地の別棟に住む３歳半の従兄のＳ介が良い遊び相手であった。

８月のある日の夕方、父親とM男は一緒にお風呂に入っていた。以前には母親が一緒に入浴させ、父親もしくは祖母が補助することが多かったが、この時期は母親が第２子を出産し、退院して間もない時期であったので、父親と入浴するようになっていた。父親はM男の頭髪を洗うため、幼児用のシャンプーが切れていたので、大人用のシャンプーを使用した。その洗髪の途中でシャンプーがM男の目に入ったようだ。M男は金切り声を挙げて大暴れをしてもがき、逃れようとした。急いでM男の髪に湯を流して、祖母がバスタオルで受け取るとしばらくして泣き止んだ。

問題に気がついたのは翌日の午後だった。晴天の中、庭で遊んで埃まみれになったので昼寝の前に入浴させようとすると、金切り声を上げて泣いて嫌がり、お風呂場へ入ることに抵抗した。やむを得ず、濡れタオルで体を拭いておしまいにした。このように、浴室と風呂に入れようとすると、火がついたように泣き喚いて嫌がる状況が強固であることが翌々日も確認された。怖がらなくても良いこと、あるいは「髪を洗うことをしないから、」と説明してもムダであった。一種の恐怖症である。恐怖の対象は浴室とお風呂である。発生原因はシャンプーが目にしみたときの苦痛・急激な恐怖と浴室・風呂に居ることの、時間的・空間的接近による連合により、本来は中性的及至快適な対象であった浴室と風呂が苦痛と恐怖を帯びてしまったこと、つまり古典的条件付けの原理で説明される。

これを聞いて（電話で相談を受けて）想起したのはベントラー（1962）の事例である。問題の形成過程が類似している。そこで、対処の仕方も類似したやり方をとると良いと直感した。ベントラーの事例を復習してみよう。

ベントラーの事例

約11ヶ月の女児・マーガレットは小さいスイミングプールの中を嬉々としてヨチヨチ歩きをして、明らかに喜んで水浴びをし、オムツ替えのときに洗われることを嫌がるようなことは決して無かった。母親が仕事に出かけるため、数日間ベビーシッターから日常のケアを受けた。この時期の終わり頃、母親がバスルームでマーガレットを入浴させようとした。最初の数分間、マーガレットは楽しそうだった。バスタブの中で立ち上がろうとして滑って転び泣き叫び始めた。激しくもがいて入浴を嫌がり、母親は彼女をバスタブから放さざるを得なかった。

翌日以降の数日、明らかになったことは、マーガレット

がバスタブ、蛇口、桶の水等に激しく反応する（拒絶反応をする）ばかりでなく、タライで洗われること、家の中のどこの水道の蛇口に同じく反応することが明らかになった。バスタブの中で滑って転んだこと、およびこのほかに不明の先行状況（たとえば、ベビーシッター）、あるいは、付随する出来事（たとえば、顔についたセッケン）が広範囲の場面でのマーガレットの大きな情動的な反応の変容を生じたことが明らかだった。

ベントラーの事例における処置

この条件付けられた恐怖、つまり、恐怖症、の治療のため、マーガレットの母親が方法の教示を受けた。ただし、大まかに適用する処置の仕方である。基本的ルールはマーガレットに対して恐怖刺激を少量提示する、ということだった。

マーガレットに対する治療は４つの部分から成り、約１ケ月継続した。第１のステップでは、空のバスタブにオモチャが置かれ、マーガレットは自由に浴室とオモチャにアクセスできるようにした。彼女は時々、浴室に入り、バスタブからオモチャを取ったが、バスタブの近くに居ようとせず、タブに寄りかかっているときオモチャで遊ぶことは嫌がった。洗おうとすると、依然として泣き叫ぶのは続いたが、タブに対する情動は弱まっているように見えた。

２番目に、マーガレットは台所の流し台を囲むキッチンテーブルに２回置かれ、流し台は水を満たし、その水の上にオモチャを浮かべておいた。初めのうち、水の近くだと彼女は金切り声を挙げた。テーブルの上ではオモチャで遊び始め、これらのオモチャが徐々に水の中に動かされて、遊ぶためには移動しないといけないようにした。彼女は水に入るのを拒んだ。全部のオモチャがタライの反対側におかれ、タライの上の棚に置かれ、オモチャを取るためにはタライの水の中を歩かざるを得ないようにした。彼女はしばらく躊躇していたが、いやいやながら、水に入った。お尻が濡れたとき、ちょっと泣いた。台所の流しでの経験がマーガレットを水に対する恐怖をやわらげた。

３番目のステップはオムツが換えの時に、マーガレットを浴室の流しで洗うことであった。彼女はお気に入りのオモチャを渡されて遊び、初めは泣いたが、やがて、キャッキャという嬉しそうな声を出す笑顔が流しの上につるされた鏡に写っていた。彼女はまた、水で遊ぶのを始め、庭のスプリンクラーでも遊び始めた。

４番目、最終ステップはマーガレットをオムツ換えの時に水を流したタライで洗うことであった。最初は泣いて嫌がったが、母親にしっかり抱かれていることにより、２日経過すると、泣くことが無くなった。

１歳と４分の３ヶ月の時、マーガレットは完全に回復して、入浴するとき、普通に、そして、やや注意深く遊んでいた。家中の蛇口、タライ、バスタブ、水に恐怖を示すことが無かった。１歳５ヶ月になっても変わらず、回復が永続的であることが確認された。

M男に対する処置

筆者の教示を受けて、M男の家族は翌日、M男をムリに浴室へ入れることはせず、庭にビニール製のミニ・プールを広げて、そこで頭から水を掛けてほこりを落とし、タオルで体を拭うだけにとどめた。翌々日はこのミニ・プールに水を入れて、オモチャの船や魚を浮かべて、遊び仲間のＳ介に先に入ってもらった。そして、彼から「Mちゃん、おいでよ！」と誘うようにしたところ、M男は水を怖がるようなこともなく、一緒に入って、水遊びを楽しんだ。次の日とさらに次の日も、入浴させず、このプールで遊び、終わる前に少し石鹸をつけた洗い布で体をこすって洗うことをした。

浴室に入れたのは「事件」から６日後だった。Ｓ介が先に浴室に入り、ミニ・プールでいつも使ったおもちゃを湯の張ったバスタブに浮かべて大声を出して遊んだ。その後、M男に声をかけて誘った。M男はすこし躊躇している様子だったが、浴室に入り、祖父に衣服を脱がされてバスタブに入れられても嫌がらなかった。翌日もＳ介と一緒に入浴し、３日目には祖母と２人で入浴できた。４日目以降は以前と変らないで普通に入浴するようになり、父親とも入浴できることも確認された。

幼い子どもが通常は怖がらない対象、もしくは他の子どもたちにとっては快適に思う対象に対して示す恐怖を取り除く方法に関して最初の系統的な研究は、M．C．ジョーンズ（1924）である。彼女は次の７つの方法を試みている。この中で、「直接的条件付け」と「社会的模倣」を除く４つの方法は、時として効果的であるが、他の方法と組み合わせて使用しないと十分でないことを見出した。

１．言葉による訴えかけ　　これは幼児に言葉で働きかけることである。ウサギを怖がる４歳の女児に、一日10分間ずつウサギについて会話を持った。ピーター・ラビットの絵本、ウサギのオモチャを導入した。しかし、生きたウサギを見せると、飛び上がって泣いた。説得されると、実験者が抱えているウサギにいやいや触ったが、床にウサギを置くと、「あっちへやって」といい、自分で部屋から逃げようとした。

２．消極的な順応　　実験的消去の原理による。なじむことによって慣れさせること。これは恐怖の対象を繰り返して提示し、恐れを感じなくしようとすることであり、ある動物が自分に噛み付くと警戒して怖がる子どもに、大人が付き添って動物に接近させ、かまないことが納得できて、恐怖心が克服される。しかし、時には反復提示が恐怖を増幅することもある。

3．不使用による除去　怖がる対象から隔離しておくことにより、恐怖の記憶が忘却されるように消去されることをさす。しかし、ジョーンズは効果を見出さなかった。

4．押さえ込み　他の子が怖がらない対象を怖がる子どもに対して、あざける、バカにする、叱る、ということが、家庭・学校・遊び場等でなされる。恥の感覚により、恐怖の表出を抑制するが、恐怖感を解消することにならない、とジョーンズは述べる。

5．気を紛らわす　恐怖対象とは別の活動を与えることで、便利な、そして頻繁に使われる方法だという。赤ちゃんが安全ピンをつかんでいるとき、他のオモチャに注意をそらして、危険なピンを取り去るというようなやり方だ。これは誰でも知っていてこれを恐怖にも応用する。しかし、これは、子どもの注意を別の対象に向かせて恐怖感を一時的になだめ落ち着かせることができても、永続的な解決にならないという。

6．直接的条件付け　ジョーンズはこれを「恐怖対象を快適な反応を生ずる刺激と結びつける手続き」と称している。食欲を用いることがもっとも有効に見えるとしている。食べ物を欲しているとき、子どもを高い椅子に置いて食べ物を与える。恐怖の対象を子どもが恐れるけど、食べる行為を妨げない程度の距離に提示する。そして、段階を追って徐々に近づけて、やがてすぐ近くまで接近させて触れるまでに近づける。ジョーンズの被験者のピーターは２歳10ケ月のときから開始して、一日一回、もしくは２回行って、約２ケ月かけて、怖がっていたウサギを怖がらなくなり、ウサギと遊ぶようになった。

7．社会的模倣　ある対象を怖がる子どもに、他の子どもが怖がらずに、むしろその対象に好意的に振舞うのを見させる手続きである。30ケ月（２歳半）のボビーは他の２人の女児と一緒のときにウサギを提示される。ボビーは「やだ、やだ！」と泣いて、実験者にウサギを遠ざけてくれるよう求めた。しかし、２人の女児が喜んでウサギに駆け寄り話しかけるのを見ると、すぐにウサギに興味を示し、怖がりながらも一緒に近づいて行った。ただし、ジョーンズは逆に、社会的模倣によって恐怖感が形成されることもあるという事例も記述している。

考　察

今回のM男の事例とベントラーの事例およびジョーンズの事例と比較考察をしてみよう。

まず、ベントラーの事例に比べるとM男の症状の形成過程が似ている点がある。ただ一度の対提示により、恐怖がしっかりと形成されている点だ。恐怖心の強さは、ベントラーの方が強固であったろう。しかし、M男が浴室そのものにも拒絶反応を示したのに対して、ベントラーの方は浴室やバスタブに対してよりも水に対して恐怖が向けられている。般化も広範囲にわたっている。M男の方はＳ介という遊び仲間が重要な役割を演じているように見える。ジョーンズのいう「社会的模倣」の要因が見て取れる。ベントラーの事例では周囲に大人しか登場していないが、自分と年齢が近い子どもが水と入浴に恐怖を示さず、嬉々として行動しているのを見ると、影響を受けやすいだろう。バンデューラらのモデリングの研究に於いて、大人のモデルよりも子どものモデルの方が模倣が生じることが検証されている（Bandura, A. 1965, 1972, Kagan, J. 1958）。

ジョーンズが「直接的条件付け」と呼んだメカニズムをベントラーは逆制止と呼んだ。内容的には同じと見られる。ジョーンズの述べた直接的条件づけは「拮抗条件付け」とも言われる原理である。ウサギを怖がるピーターが母親に抱かれて好物の食べ物を食べている場面で、部屋の隅に金網の檻に入ったウサギを見せられる。母親に抱かれていることと、好物を食べていることにより、その怖さに負けずに済む。日にちをかけて徐々に恐怖の対象を近づけて、より強い恐怖に耐えられるようになって行く。楽しい経験とウサギとが新たに結びつけられ、当初怖い対象だったものが快適な対象へと変化するとも見なされる。徐々に恐怖の対象を近づける過程は「系統的脱感作」の手続きと同じであり、内山喜久雄らによって登校拒否児の治療のテクニックとして考案された継時近接法にも通じるものである。そこで、今回のM男にたいする処置をベントラーと同じく、ここでは逆制止と呼ぶことにする。

注１．ワトソンら（Watson & Raynor 1920）は幼児に条件づけにより今まで怖がらなかった対象に対する恐怖を形成する実験を行った。11ケ月のアルバートが白ネズミを怖がらないことを確認し、また、背後で長さ４フィート、直径４分の３インチの鋼鉄の棒をハンマーでたたくと怖がることを確認した。次に白ネズミを提示すると同時に鉄の棒をハンマーで打ち急激に大きな音を聞かせる。この対提示を７回行った。すると、白ネズミだけを提示しても怖がるようになった。この白ネズミに対する恐怖は永続的であったが、この怖い経験をした部屋、テーブル、テーブルの上のブロックには転移していなかった。そして、条件つけられた情動反応は、犬、毛皮のコート、サンタクロースの仮面に対しても般化が見られた。

文　献

Bandura, A. (1965) Influence of model's reinforcement contingencies on the acquisition of imitative response. Journal of Personality and Social psychology. 1, pp.589-597.

Bandura,A. (1986)『Social Foundation of Thought and Action』Prentice Hall.
本明　寛・野口京子・監訳『激動社会の中の自己効力』金子書房

Bentler,P.M. (1962) An infant's phobia treated with reciprocal inhibition therapy. Journal of Child Psychology and Psychitry 3,pp.185-189.

異常行動研究会 (1975)『脱感作療法』誠信書房

Jones.M.C. (1924) The elimination of children's fears. Journal of Experimental Psychology. 7,pp. 382-390.

Kagan,J. (1958) The concept of identification. Psychological Review. 65,pp.296-305.

Ollendick,T.H. (1979) Fear reduction techniques with children. Progress in Behavior Modification. 8,pp.127-168.

小室康平 (2001)「虫を怖がる女子学生の系統的脱感作による心理治療事例の検討」短大論叢 (関東学院女子短期大学) 106,pp.41-53.

内山喜久雄 (1972)『行動療法』文光堂

内山喜久雄 (1988)『行動療法』日本文化科学社

内山喜久雄・藤田正・松村茂治 (1972) 登校拒否の行動療法的アプローチ(2) 継時近接法の臨床的吟味 教育相談学研究 (筑波大学教育研究科カウンセリングコース) 12,pp.1-11.

Watson,J.B. & Raynor,R.R. (1920) Conditioned emotional reactions. Journal of Experimental Psychology. 28,pp.1-14.

Wolpe,J. (1069)『The Practice of Behavior Therapy』Pergamon Press.
(内山喜久雄・訳『行動療法の実際』黎明書房 1971)

Wolpe,J. (1069)『Psychotherapy by Reciprocal Inhibition』 University Press.
(金久卓也・訳『逆制止による心理療法』誠信書房 1977)

米山直樹 (2004) 事例研究・自動車恐怖の女子児童に対する系統的脱感作の適用事例 上越教育大学心理教育相談研究 3,pp.41-52.